政治の再生に向けて

高橋はるみ知事と上田文雄札幌市長に関して、気になる噂がささやかれている。高橋知事は今年中に行われる可能性がある衆院総選挙に、北海道一区から出馬して横路孝弘衆院議長と激突する。任期途中の辞職になるので道知事選が行われることになり、上田氏が札幌市長を辞し脱原発を掲げて挑むため、道知事選と札幌市長選のダブル選挙になる。

昨年一一月に、大阪府知事選と大阪市長選の「大阪ダブル選挙」が行われたためであろう。一見、荒唐無稽な話に聞こえるが、それなりに筋が通った理屈はつけられる。選挙で圧倒的な強さを誇る横路氏に対抗できる保守系の候補がいるとすれば、道内では昨年の道知事選で史上三位の得票だった高橋知事を置いて他にはいない。「元知事・現職知事」となれば、全国的にも大きな注目を集めることは間違いなく、自民党サイドとしては総選挙の目玉にできる。

他方、上田市長はかねて北電泊原発に対する道の対応、原発政策全般に不満を持っており積極的に発言してきたが、道の方針に口出しできる権限はないため、歯がゆさを感じている。知事選に打って出て勝利できれば、弁護士時代からのライフワークである脱原発の実現へ踏み出せる。

現実には、慎重な高橋知事が落選リスクのある衆院選の道一区にチャレンジするとは思えないし、今さら一年生議員をやろうと思うほど、うぶではないだろう。上田市長にしても、市電延伸など力の入れてきた政策がまだ中途半端な段階だし、道知事選に出たとしても勝つのは簡単なことではない。その意味では憶測の域を超える話ではないが、統一地方選から一年も経たないうちにこうした話題が出て来たことについては、少々まじめに受け止める必要がある。つまり、「知事も市長もそろそろ交代してほしい」という願望がこの話には込められているのではないか。三期目も残り任期はあと三年となり、もう続けてほしくないという心理が透けて見える。

三選したばかりなのにもう代わってほしいと願うのは、あまりに勝手な話ではある。だが、この一年の二人の言動を見ていると「もう代わってもらった方がいいかな」という感想が生じるのも分からなくはない。東京電力の福島第一原発事故が起き、従来の原発政策は根底的に見直す必要に迫られているにもかかわらず、高橋知事は原発推進の姿勢をにじませており、泊原発三号機の営業運転移行も政府の求めに応じて結局は認めてしまった。上田市長も、脱原発の思いが強いのは分かるが、やや空回りしている感が否めない。北電に直談判に行って広報部長にあしらわれるようなまねは、一九〇万都市の首長のやることとしては相当にみっともない。

ただ、大阪ダブル選を機に脚光を浴びている「任期途中辞職↓選挙戦出馬」という政治手法は本来、邪道である。たまたま橋下徹大阪市長は大阪府民に理解されたようだが、そう簡単に職を投げ打てるほど知事の座は軽いのか。有権者は公約を実現してもらうために四年間を与えたのであり、健康など特段の理由がない限り、約束の期間を全うして公約を仕上げるのが筋である。

任期途中で放り投げる失態は、国政でイヤと言うほど見せつけられている。この国の首相は小泉純一郎以降、毎年変わるほどの不安定さで、その結果、政治不信が加速し、国際社会では日本の存在感はきわめて薄くなってしまった。このうえ地方の首長の間でも「辞め癖」がついてしまったら、日本の民主主義は間違いなく崩壊するだろう。

結局、高橋知事にも上田市長にも任期いっぱいやってもらうしかない、という凡庸な結論に落ち着く。そして、先の選挙戦で掲げた公約がしっかり実現されるよう、有権者が関心を持ち続けなければいけない、という分かりきったことを繰り返さざるを得なくなる。だが、この「分かりきったこと」を実現させるのが途方もなく難しいということには、改めて思いを至らせるべきである。

現在、政治不信は極まっており、重篤ではあるが特効薬はない。しかし、身の回りの政治から見つめ直し、議論に参加すること以外に、政治の立て直しはあり得ないのではないか。政党が信用できなくても、信頼に足る政治家を見つけ、育てていくこと。政治の再生はそこから始まる。

〈木〉